

# 石見銀山遺跡発掘調査概要 5

1 9 9 2 . 3

島根県大田市教育委員会



下川原下組地区遺構検出状況

# 序

石見銀山は中世後期から開発され、戦国時代から江戸時代の初期に至り最盛期を迎えます。そして織豊政権や江戸幕府の資金庫として重要視されるとともに、その精錬技術は各地の鉱山に伝えられ、日本の鉱山の中でも先駆的な役割を果たしたことで有名です。

石見銀山遺跡には国指定史跡である代官所跡や坑道跡である間歩など数多くの遺跡が存在しますが、これをどのように保存し、活用していくかということは大田市のみならず島根県としての課題にもなっています。

この貴重な文化遺産を子孫に引き継ぐために、これまでいくらかの部分を整備し活用を促してきたところですが、近年では昭和61年に町並みの部分が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、平成元年には国指定史跡の龍源寺間歩を整備し、一般公開として活用を始めたところです。

このような整備事業の進捗とともに、埋蔵文化財保護の立場から発掘調査も継続して実施しています。今年度は銀山の下川原下組地区で調査をおこない、江戸時代初期の製錬所の跡が発見されました。この製錬所の跡は江戸時代の銀製錬の施設や作業を考える上で貴重な資料を提供したといえます。

この報告書が今後の整備事業や石見銀山史の解明に広く活用されることを祈念いたします。

平成4年3月

島根県大田市教育委員会

教育長 大久保 昭夫

# 例　　言

1. 本書は平成3年度の国県補助事業として島根県大田市教育委員会が実施した、石見銀山遺跡発掘調査の報告書である。
2. 調査体制は下記のとおりである。

島根県大田市教育委員会 教育長 大久保 昭夫  
文化振興室 渡 吉正 清水 新二郎  
林 泰州 速藤 浩巳（担当者）  
山田 幸 井野 裕子

調査指導 村上 勇（広島県立美術館）  
葉賀 七三男（資源素材学会）  
丹羽野 裕（島根県教育委員会文化課）

3. 収録した地図・実測図は大田市教育委員会が作成したものを主とし、一部については関係機関作成のものを利用した。
4. 出土遺物および作成した図面・写真は大田市教育委員会で保管している。
5. 実測図等に示した方位はいずれも磁北である。
6. 本書の執筆・編集は上記の速藤浩巳がこれをおこない、関係各位の協力を得た。  
また出土したからみの分析結果については、葉賀七三男先生から玉稿をいただいた。  
記して謝意を表わす次第である。



# 目 次

	頁
I 調査の概要・経過	1
II 石見銀山遺跡の概要	3
III 調査の概要	7
IV まとめ	21
V 石見銀山遺跡下川原下組地区出土からみの分析調査結果	25

## 図版

## 挿 図 目 次

	頁
図1 石見銀山遺跡位置図(1/25,000)	2
図2 調査地の現況と調査区設定図(1/500)	8
図3 遺構実測図(1/100)	9~10
図4 遺構断面図(1/100)	11
図5 土層実測図	12
図6 石組遺構実測図	13
図7 第1・2炉跡実測図	14
図8 潜伏状遺構実測図	14
図9 建物内土間出土陶磁器実測図	16
図10 側溝内出土陶磁器実測図	17
図11 石組遺構北落込み出土陶磁器実測図	18
図12 遺構に伴わない遺物実測図(1)	19
図13 遺構に伴わない遺物実測図(2)	20
図14 遺構配置図(1/200)	23~24

## I 調査の概要・経過

石見銀山遺跡は昭和44年に山吹城跡や坑道跡7ヶ所などの計14ヶ所が史跡指定を受けて以来、代官所跡と坑道跡である間歩を中心に整備や活用が進められてきた。昭和58年からは島根県教育委員会による石見銀山遺跡総合整備計画策定事業が4年計画で開始され、遺跡整備の基本構想、基本計画の策定をめざし調査と検討がおこなわれている。

埋蔵文化財としての石見銀山遺跡は、これまでに指定された山吹城跡や間歩についてはおおまかな様相や写真などによる整備がなされてきたが、近年歴史考古学の分野で中・近世遺跡の調査・整備の事例が各地で増えるとともに、全国的にも稀少な鉱山遺跡ということで石見銀山遺跡の保護と活用が再認識されるようになってきた。大田市教育委員会は遺跡の保存保護のための主要箇所での発掘調査を昭和58年度、昭和63年度以降実施しており今年度で5年度目を迎えることになった。これは一方で関連整備事業や開発事業の事前調査がここ数年増加する傾向にあることにもよる。

今年度は大田市建設部による都市計画公園事業の事前調査で実施した石見銀山遺跡・銀山町下河原下組地区の調査において、建物の礎石・側溝などが良好な状態で検出されたため、将来の整備事業の導入も考え調査地を変更し、この建物跡の規模・性格等を確認するための調査を継続して実施することとなった。この建物跡は事前調査終了時で間口約10mで南側に側溝をもち、造構面で鉱滓がかなり出土することが判明していたが、精錬に関連する施設の可能性もあることから、建物1棟分は全面発掘しその規模を確認し、隣接する建物については間口部分に調査区を拡げて調査を実施することとした。

調査は平成4年2月から3月までのうち約1ヶ月半を要し、約530m<sup>2</sup>の調査を実施した。調査の結果、北側に間口をもつ建物跡と、その内部で炉跡や石組造構を、また隣接する部分では、建物跡と思われる礎石の一部と溜槽造構を検出した。出土した陶磁器はかなりの点数があるが、そのうち造構に伴うものが何点かあり、建物の時期や性格を考えるうえで手懸りになるものである。

今回の調査は良好な造構が検出されたことで、今後の調査や整備に多くの示唆を与えることになった。また調査を通じて地元大森町をはじめ多くの方々からご指導、ご協力をいただいた。改めて謝意を表わしたい。

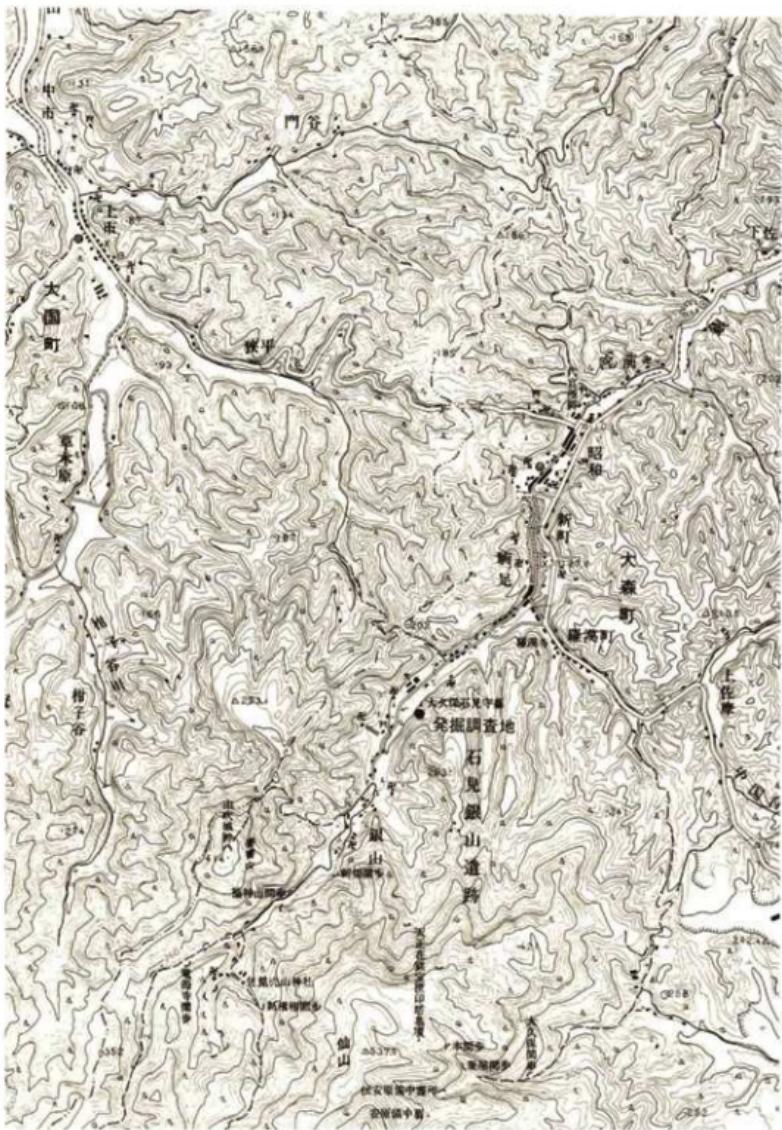


図1 石見銀山遺跡位置図 (1/25,000)

## Ⅱ 石見銀山遺跡の概要

### 1. 銀山史について

石見銀山は鎌倉時代末期の延慶2年(1309)に発見され、本格的な採掘は大永6年(1526)に博多の商人神屋寿楨が入山し、天文2年(1533)寿楨が博多から慶寿と宗丹を呼び、灰吹精錬法が伝えてからといわれる。これ以後産銀量は著しく増大し日本の鉱山の中でも重要な位置を占めるようになる。当時の東アジア世界ではポルトガルが中国の生糸・絹織物を塔載して日本に来航し、銀を入れ、東南アジアの香辛料などを持ち帰る中継貿易をおこなうが、この時の銀の大部分が石見銀山産であったと推測されている。

石見銀山は戦国期に至り大内・尼子・毛利などの戦国大名によって山吹城を拠点とした争奪戦が繰り広げられる。周防国の大内氏が最初に銀山を治め、たくさんの掘り子大工を連れて入山し採掘を始めたといわれる。享禄4年(1531)には邑智郡川本温湯城主小笠原氏が銀山を奇襲攻撃して掌握するものの、3年後には大内氏は再びこれを奪い返している。その後尼子氏・毛利氏が加わり永禄5年(1562)に毛利氏が完全掌握するまで争奪戦は35年余り続いている。豊臣秀吉が天下統一を進める過程で、石見銀山は秀吉と毛利氏の共同管理に移行し、秀吉は文禄2年(1593)の朝鮮出兵時に石見銀を大量に博多に運んで文禄丁銀を造り戦費に充てたといわれる。

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いで徳川方が勝利を収めると、家康は石見銀山に上使を派遣して翌6年から大久保長安を銀山の管理奉行とするとともに、周辺の144ヶ村を石見銀山御料として直轄地とした。初代奉行の大久保長安は坑道掘りを導入するとともに、御料内の検地などを実施した。この頃備中國から來ていた安原伝兵衛という山師が釜屋間歩の鉱脈を発見し、おびただしい銀を探掘し貢銀3,000貫を家康に運上し、辻ヶ花染丁字文胸服一領と扇一柄を拝領している。

石見銀山の最盛期は戦国時代末から江戸時代の初期といわれ、『石見國銀山旧記』には「慶長の頃より寛永年中大盛、土穀の人数二十万人、一日米穀を費やすこと千五百石余」とか「家数式万六千軒余、寺百ヶ寺程も有之」と記されている。全体に誇張されているが人口10万人前後はあり、産銀量も年間8,000貫から10,000貫はあったと推定されている。これ以後、坑道が深くなり湧水処理に経費がかかるようになると産銀量は著しく減少し、延宝年間(1673~1680)に入ると奉行も代官に代わり、産銀量年間400貫位に減り、幕末の

安政6年(1859)には30貫となった。

江戸時代265年間には奉行・代官・預りが59人も入れ替わり、石見銀山御料約150ヶ村4万8千石の統治と銀山の管理をおこなった。その中でも初代奉行大久保長安と享保17年(1732)の飢饉を救った19代目の井戸平左衛門は有名である。

慶応2年(1866)に戊辰戦争が起き長州軍は石見へ進撃し、益田の七尾城、浜田城を落として銀山御料内へ侵入、代官鍋田三郎右衛門は備後國の上下の陣屋に逃亡した。これより長州藩が旧銀山御料の管理と統治の任にあたった。明治政府が誕生すると、明治2年8月から約半年間大森県が置かれ、翌3年からは浜田県と改められ、同9年には隱岐・松江・浜田を合わせて現在の島根県がつくられた。幕末から明治期の産銀量は慶応2年(1866)には年産20貫まで減り、明治期になり大森町の有志が一鉱区を掘ったが思わしくなく、明治5年の浜田沖地震では銀坑道のはとんどが崩壊した。明治20年になって大阪の藤田組の経営となり、その後同和工業㈱に受け継がれ、明治25~29年頃までは、一時的に産銀量が年平均540貫と増加した。大正6年の銀山(仁摩町の永久坑)の従業員は約700人いたが、坑道の地下水が多量に湧き出るため採算が合わず、大正12年3月に閉山されることになった。

## 2. 石見銀山に関連する遺跡について

石見銀山遺跡は大田市大森町を中心に周辺の仁摩町・温泉津町・邑智町などを含めた広範囲に遺跡が分布し、その中心となる大森町では約100ヶ所の遺跡が存在する。

### (1) 城館遺跡

戦国時代石見銀山を巡る争奪の拠点となった山吹城跡とその周辺に城館遺跡がある。陥阻な要害山に築かれた山吹城跡は頂上部に階段状に曲輪を配し、主郭の南には大規模な空堀、南斜面には計19本の豊堀、北側の曲輪には一部石垣がみられる。山麓の大手には「下屋敷」「御文庫」などの地名があり、長大な石垣が残っている。この大手には武家屋敷、大手の南には「魚店」「京店」「上市場」などの地名があり城下町を形成していたと考えられている。他の城郭としては仙ノ山城郭群・矢滝城がある。

### (2) 銀山支配関係遺跡

銀山支配の遺跡として代官所跡・番所跡などがある。代官所跡は南北に細長い谷間に形

成された大森の町並の北側に位置し、表門と門長屋が現存している。代官所跡の東側には仲間長屋跡・向陣屋跡・御銀蔵跡・馬場跡などがあり、代官所周辺には行政関係の機関・役宅が置かれていた。銀山はその周囲に柵列を巡らし「山内」として閉鎖され、独立した空間を形成していた。九つの番所が入口に置かれ、人や物資の出入りが管理されていた。遺跡としては藏泉寺口番所跡・坂根口番所跡が知られる。また個々の坑道の入り口には四ツ留役所が置かれていた。

#### (3) 銀生産遺跡

坑道跡・吹屋（精錬所）跡・集落跡などがある。史跡指定された間歩としては大久保間歩・龍源寺間歩など7坑道があるが、文政6年（1823）の間歩改めでは休止坑を含め279坑を数えている。間歩のほかに縦坑や露天掘り跡も多くみられる。銀精錬をおこなった吹屋跡として柄畠谷灰吹跡・山神奥灰吹跡がある。鉱山集落として大規模なものとして石銀集落跡・柄畠谷集落跡がある。

#### (4) 信仰遺跡

現在知られている信仰遺跡としては墓地・供養塔などの石造物と寺院跡・神社がある。石造物のうち宝篋印塔・無縫塔などの墓地は戦国期から近世までのものが多く残されている。寺院跡はこれまでの調査で33ヶ所の寺跡が確認されている。神社としては式内社の城上神社、銀山の守護神としての佐毘売神社などがある。

#### (5) その他の遺跡

大森の町並のなかには町年寄遺宅・郷宿遺宅・地役人遺宅・同心遺宅などの建物跡が残る。また町の大半が消失した寛政12年（1800）の大火以前の町並の遺構についても遺存している可能性がある。

### 3. 石見銀山遺跡の調査の概要

昭和59年度から実施している石見銀山遺跡発掘調査は、遺構の遺存状況を確認し保存・整備の資料を得ることを主眼とした調査であり、調査面積が限られたため遺構の全体が検出され、その内容や性格について十分に明らかにされたものは少ない。しかし部分的ながら遺構が良好な状態で検出され、さらに出土遺物についても戦国時代から近世・近代のも

のも含めて多量に出土しており、その内容についても食器などのほかに精鍊に使用された「るつぼ」など鉱山遺跡に特有なものも見られる。

これまで実施した調査から石見銀山遺跡の遺構のあり方、出土陶磁器等の概要が明らかにされている。遺構はそれぞれの調査地において、各時代の遺構面が比較的良好な状態でかつ重複しながら遺存している例が多く報告され、また共通して指摘されているのが整地層の問題である。石見銀山においては新たに整地をおこなう場合、銀坑道を掘った際に出るズリ・ガラ、銀精鍊の際に出る鉱滓（カラミ）が多量に埋められており、この中に含まれる陶磁器は16世紀後半以降の中国磁器、16世紀末から17世紀初頭の唐津焼が多くみられ、銀山の開発や整地された時期を考える際の指標となることである。

次に石見銀山遺跡出土陶磁器の数量のあり方について戦国期から幕末までを概観すると、16世紀後半から17世紀前半は中国磁器、唐津・唐津系陶器を中心で備前・信楽なども含まれる。調査地によっては志野なども出土しているが、瀬戸美濃系はほとんど含まれない。17世紀後半以降は肥前磁器の割合が増えるとともに、18世紀以降は近隣の陶磁器（石見焼等）がはいるようである。

石見銀山遺跡は中近世遺跡であり、また産業遺跡であることから調査により検出される遺構も様々である。遺跡によっては都市的な様相を示すものもあり、遺跡の分布調査を含め発掘調査、保存・整備の長期的な計画が必要となっている。

### III 調査の概要

#### 1. 遺跡の位置と環境

石見銀山遺跡下川原下組地区は大田市大森町銀山下川原下組東平に位置し、南北に細長い谷間に広がる大森町のなかでは比較的広い場所である。歴史的にみると、この下川原一帯についてはあまり資料等が存在しないところである。文献史料では戦国時代の『毛利家文書』から、毛利家の生田・服部という二人の家臣がこの下川原に屋敷を構えていたといわれる。江戸時代になると正保2年(1645)に作成された『石見国絵図』(島根県指定文化財:津和野町所蔵)等から、銀山は柵列で囲まれ「山内」として独立した空間を形成し、入り口には九つの番所が設けられていたことがわかる。そして藏泉寺口番所から下川原、大谷に続く道沿いには家並みが続いているようである。

下川原下組地区の周辺には、東側に接して大久保石見守の墓所(大安寺跡:国指定史跡)が、道を挟んだ北側には西本寺が、西本寺の北側には長泉寺跡がある。また西本寺の西側には長安寺(現在の豊栄神社)、安立寺(現在の極楽寺)があった。この下川原一帯は寺院が集中し、戦国時代以降“寺町”ともいえるような様相を呈していたと思われる。

#### 2. 遺構について

調査は5m四方のグリッドを設定し、東西方向に5mごとにA~F、南北方向に1~6の基準点を設け、グリッドの番号は4つの杭のうち最も若いものの記号をもってグリッド番号とした。

調査の結果、検出した遺構として間口6間の建物と隣接する間口2間の建物の一部がある。これら2間の建物跡は間口を道路側に設け建築され、敷地境には溝をもっている。道路側の部分は現在の市道建設の際、一部破壊を受けていることが明らかになった。間口6間の建物跡は、礎石建物で内部に炉跡等の精錬施設をもち、また西側の敷地内には調査範囲内で溜柵状遺構、間口2間の建物跡を検出している。

調査区内の土層を観察すると、調査区全域にわたってズリなどの礫、製錬の際排出されるカラミの層が広がっているが、これは後世の整地のために入れられたものが大半であるが、詳細に観察すると細かく砕かれた礫やカラミなどが遺構面に堆積している箇所もあり、

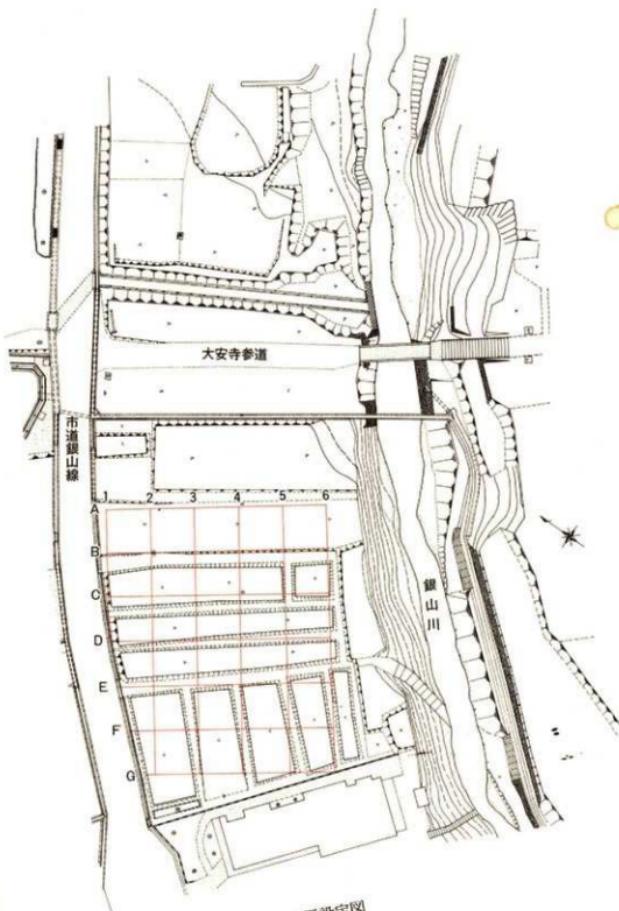


図2 調査地の現況と調査区設定図



図3 遺構実測図 (1/100)

これについては銀製鍊作業にともない排出されたゆりかすやカラミと考えられる。また遺構面は黄褐色粘土のタタキであるが、この面には暗灰色砂層が広い範囲で厚さ10cm前後で堆積していることが判明し、堆積の状況から水の流れとともに堆積したもので、銀山川の氾濫等を考えることができる。また耕作土・暗褐色土の下に黄褐色土・黄褐色砂質土の層が部分的に確認できることから、検出した遺構の後に、遺構面が築成された可能性がある。

#### (1) 間口 6間の礎石建物跡

建物内は粘土のタタキによる土間で建物内・敷地内に銀精錬施設をもつ。

#### 礎石・側溝

間口 6間の建物跡および敷地内で確認された礎石のほとんどは地元産の凝灰岩の切石を使用している。東側の石列になる礎石はかなり大きな石を使用しており、最大のもので約120×70cmを測るものがある。この石列は壁や塀の礎石になるもので、大きな石とやや小さい石を交互に隙間がないように並べている。西側の石列は側溝と礎石を兼ねたものであるが、これについては北側の約10mは西側と同様に平坦な凝灰岩の切石を使用している。南側の約7mは加工されていない自然石や凝灰石で側溝および石積を築いている。北側の礎石になる石には柱の位置を示す約12cm(4寸)角の柱の痕跡があり、この痕跡は約100

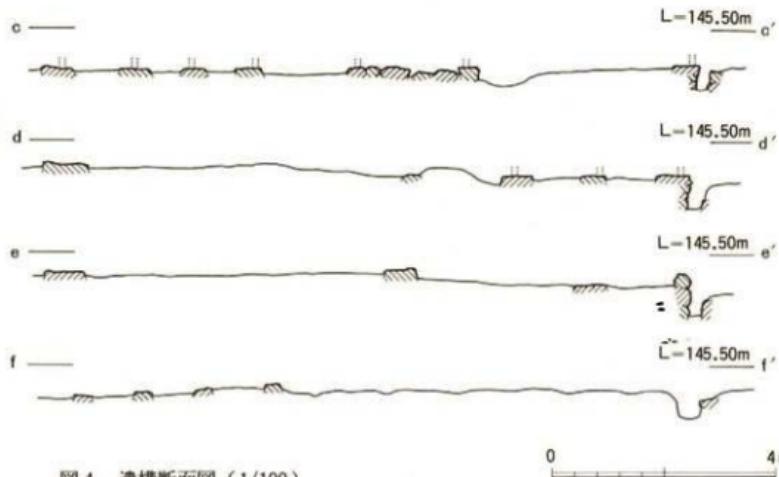


図4 遺構断面図(1/100)

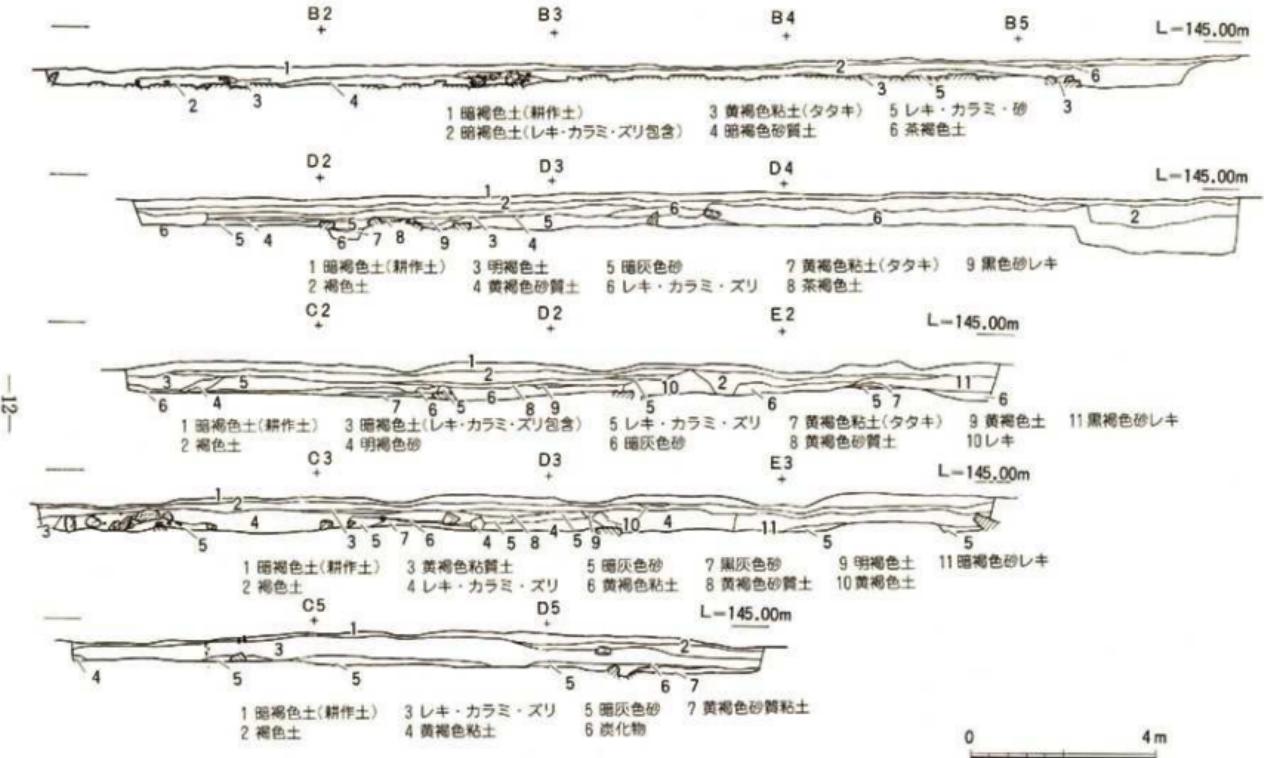


図5 土層実測図

cm（半間）間隔で並ぶことが確認された。この西側の礎石以外にも、建物の内部で柱の痕跡を残す礎石がある。

#### 石組遺構

南北約1.2m、東西約2.7mの範囲で石組遺構を検出した。構造は地元産の凝灰岩で長方形に囲み、その中を小規模な礎や製錬の際に排出されるからみを充填することで平坦面を作り出している。土間からは約20cmの高さに築かれている。この石組遺構に接して鉱石を碎く際の台石になる要石が土間に埋め込んで置かれている。北側は約2m四方でくぼんでおり、土間からの深さは最も深いところで約40cmである。このくぼみの東側は平坦な石を立てて土間との境界を作り出しているが、北・西側についてはゆるやかな傾斜になっており、一部攪乱を受けている。

この石組遺構は建物内に築かれた作業台で、またくぼみについても水を溜めた施設と考えられ一体として使用されたと考えられるが、性格は不明である。

#### 炉状遺構

建物跡敷地内で2ヶ所の炉跡を検出した。第1炉跡は炉の石組がはっきりしないものの焼け黒く変色したと思われる石が集積して検出されたこと、周辺の土間がよく焼け炭が土間面から多量に出土したことなどから炉跡と考えられるものである。炉の石組については土間に埋め込まれたものと土間面にのせられたものがあるが、使用後あるいは後世の攪乱を受けた可能性があり、原形をつかむことはで

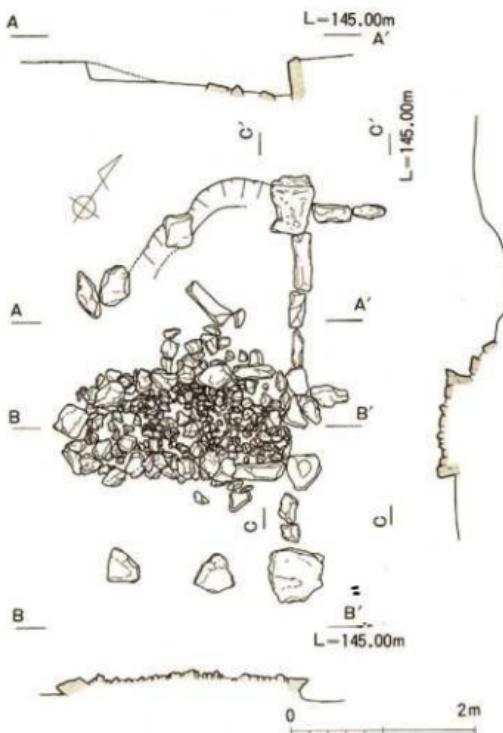


図6 石組遺構実測図

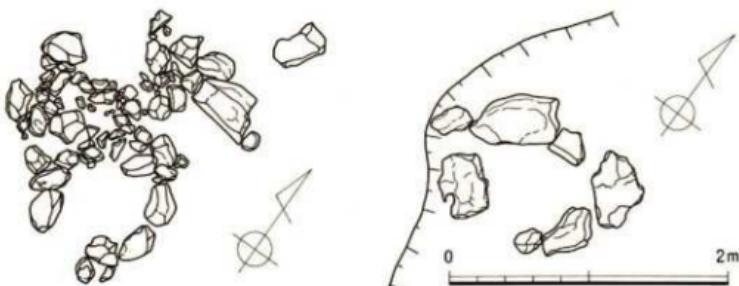


図7 第1・2炉跡実測図

きなかった。

第2炉跡は、屋敷地の南側で検出したもので円形に石が置かれている。内径で約□□mを測るもので、石の内側がよく焼けている。炉の内部構造については一部掘り下げ確認をおこなったにとどまるが、2～3段に石が積まれ内部は粘土質の土で埋められている。

#### 溝状遺構

建物跡敷地の南側で、幅約30cm長さ約5mの南北方向に走る溝を検出した。これは全掘をせず上端の確認をただけであるが、銀山川への排水溝と考えられるものである。この排水溝の西側には、幅40～60cm

深さ5～10cmの浅い溝が5本、

排水溝と並行して走っている。

これは製錬に使用された配水が  
流れた痕跡と考えられる。

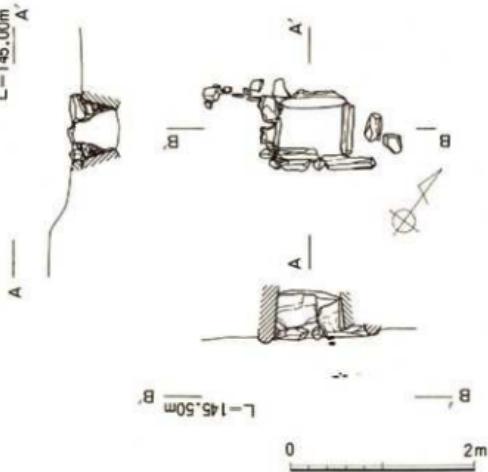


図8 溝樹状遺構実測図

構の南側には一段高いタタキの土間が検出され、表面がよく焼けていた。

### (3) 間口 2 間の礎石建物跡

間口 6 間の建物跡に隣接する西側の敷地内に建てられた礎石建物跡である。現在の市道に間口を面して建てられており、奥行は 3 間以上である。西側の石列は連続して並んでいるが、東側のものは間隔があり、後世の抜き取りや攪乱が考えられる。この建物の内部の土間もタタキにより築成されているが、表面からは多量の炭化物が出土し、よく焼けて全体が赤く変色している。

## 3. 出土遺物について

### (1) 陶磁器

出土した陶磁器は碗・皿・壺・すり鉢・瓶などがある。出土陶磁器の産地・年代等の概要は、産地は中国磁器、唐津・唐津系陶器が主なものであるが、そのほか備前・信楽などがある。これらの年代については、中国磁器は16世紀後半から17世紀初頭のもの、唐津・唐津系陶器については16世紀末から17世紀代のものが中心である。出土地については遺構に伴うものと伴わないものがあるが、遺構に伴うものとしては、建物用の土間上から出土したもの、側溝内から出土したもの、石組遺構に隣接する落ち込み内から出土したものがある。遺構に伴わないものとしては、レキ・カラミ・ズリの層から出土するものが最も多く、これについてはレキ・カラミ・ズリと共に整地のために運ばれた可能性がある。

### 建物内土間出土陶磁器（図 9）

1～3 は唐津・唐津系陶器である。1 はたたき成形の鉄釉の瓶、2 は碗で胎土目当のもの、3 は灰釉溝縁皿で胎土目当のものである。これらの時期については1590～1630年代と思われる。4 は中国磁器の染付合子の蓋で、菊の花を描いたものである。時期は16C 後半～17C 初頭のものと思われる。5 は李朝系磁器の白磁碗で高台内まで施釉している。6 は中国産の天目茶碗で、時期は16C 代のものと思われる。7 は備前系陶器の鉢で、口縁部を 4 ケ所内側に折り曲げている。

これらの出土した陶磁器のほとんどは石組遺構周辺の土間上から出土している。また中国磁器、唐津・唐津系陶器、肥前磁器などを中心に、小片が土間上から多量に出土している。

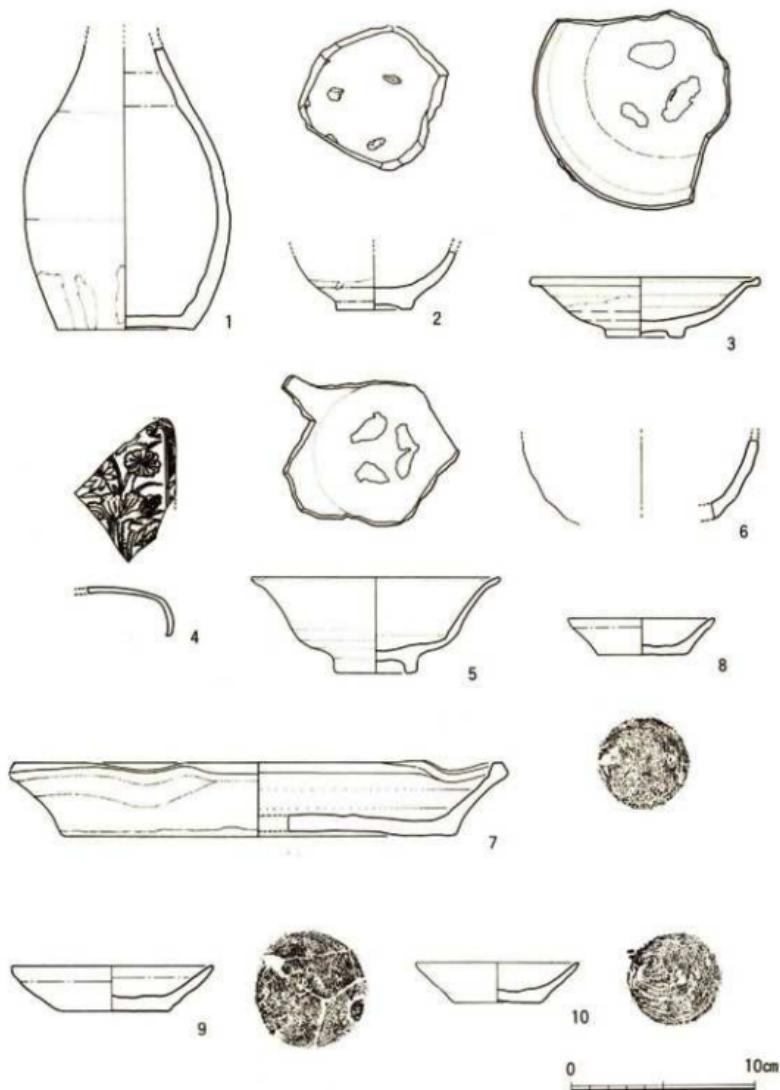


図9 建物内土間出土陶磁器実測図

#### 側溝内出土陶磁器（図10）

1～4は唐津・唐津系陶器である。1は施釉した片口、2～4は皿で2、4は胎土目当のものである。5は備前系陶器のすり鉢の口縁で、おそらく片口になるものである。側溝内からはこれらの陶磁器のほかに、中国磁器、唐津・唐津系陶器などがあるが、時期については中国磁器は16C後半～17C初頭、唐津・唐津系陶器については1590～1630年代のものと思われる。

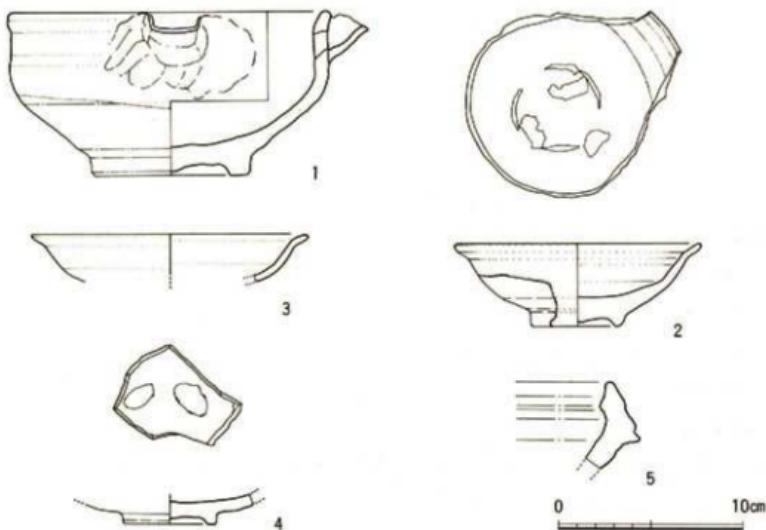


図10 側溝内出土陶磁器実測図

#### 石組遺構北落込み出土陶磁器（図11）

石組遺構の北に隣接する落込み（土こう）からは、中国磁器、唐津・唐津系陶器が出土している。1～3は中国磁器で、1は染付の大形の皿、2は白磁皿、3は染付皿である。これらの時期は1・2は16C代のもの、3は16C後半～17C初頭のものと思われる。4・5は唐津・唐津系陶器で4は瓶の頸部、5は皿で目当はみられない。時期についてはいずれも1590～1630年代のものと思われる。

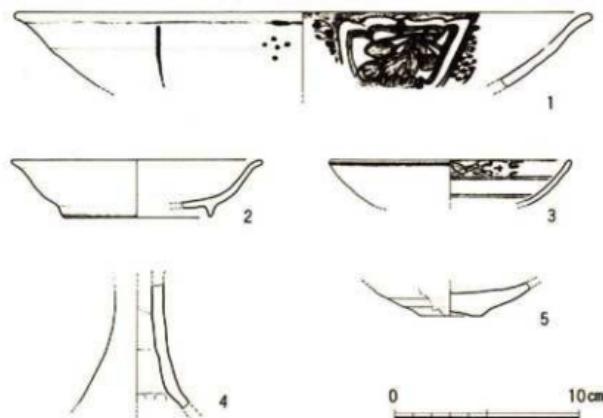


図11 石組造構北落込み出土陶磁器実測図

造構に伴わない陶磁器（図12・13）

造構に伴わない陶磁器としては、レキ・カラミ・ズリの層から出土した陶磁器がある。図12の1～7は唐津・唐津系陶器である。1は絵唐津の皿で内面の口縁近くに草花文があるもの、2は口唇部に縁どりした皿で見込は無文のもの、3は体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾し、内面に段、稜をもたない皿である。1・2は胎土目当であるが、3は目当がみられない。4・5は碗で、5は天目茶碗である。6は鉢で内面に稜がつき、口縁が外反するものである。7は三島唐津の象嵌の大形の鉢で、胎土目当のものである。8は絵唐津の壺で有頸で肩が丸くなるものである。これらの時期については概ね16C末～17C代のものと思われるが、1・2・3・7・8については1590～1630年代のものと思われる。9は中国磁器の染付葵筒底の皿で、時期は16C後半～17C初頭のものである。10は李朝系の磁器碗で高台内面まで施釉のあるものである。図13の1は織部焼の向付、2は備前焼のすり鉢の口縁、3は肥前の染付碗である。

(2) その他の遺物（図13、4～7）

釘・キセル・古銭などがある。4は和釘で現存長11.4cmを測るものである。5～7はキセルの雁首と吸口である。これらの遺物のほかに古銭として「寛永通宝」やビタ銭数点ある。石製品としては土間に埋め込まれた要石のほかに、造構に伴わない要石が9、石臼が1出土している。

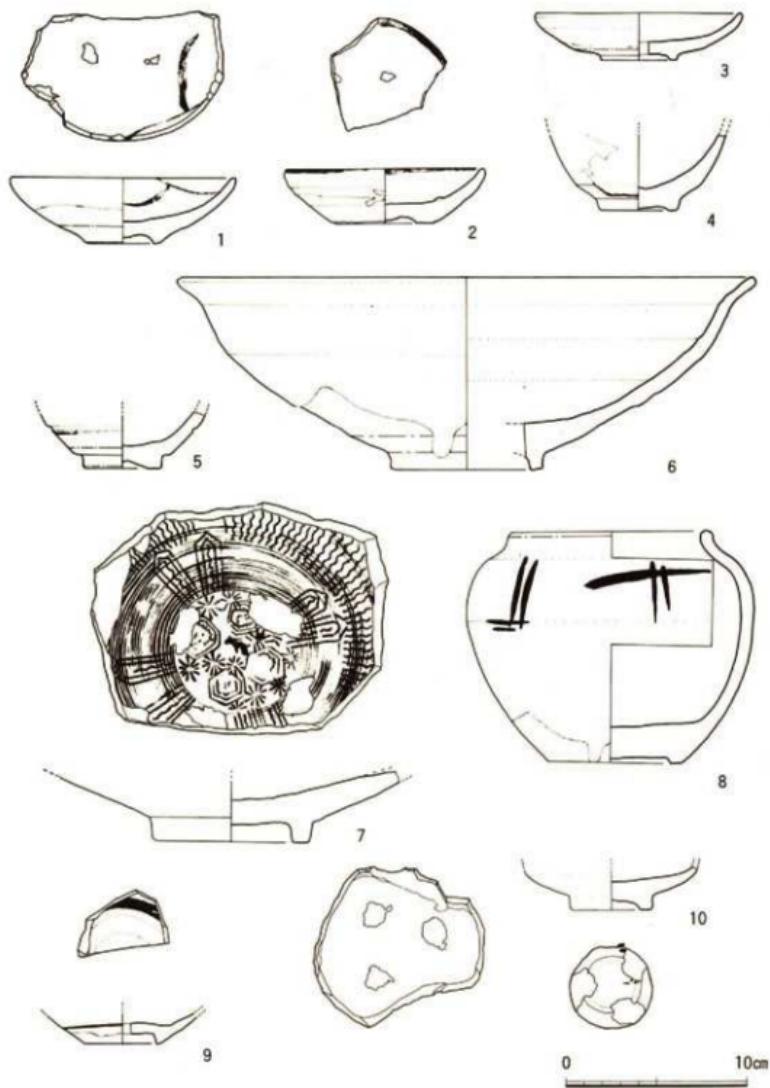


図12 遺構に伴わない遺物実測図(1)

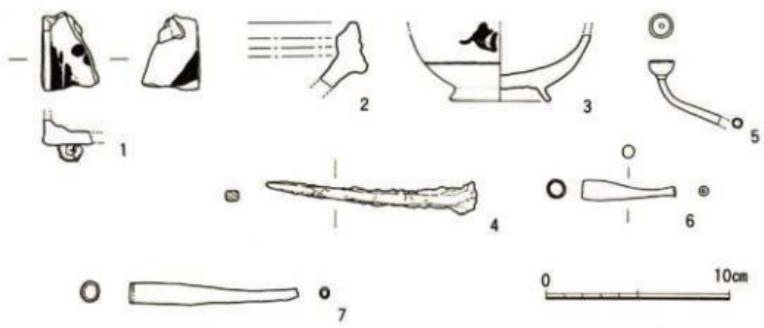


図13 遺構に伴わない遺物実測図(2)

## IV まとめ

### (1) 遺跡の性格・時期について

遺跡の性格は検出した遺構・遺物から銀の製錬所跡、すなわち江戸時代において「吹屋」と呼ばれていた建物跡と考えられる。検出した建物跡は間口6間と規模が大きく、坑夫の住宅や町家とは考え難く、その内部に銀製錬の選鉱過程で使用される要石が土間に埋め込んであることや、製錬過程で使用された炉跡があること、また出土した鉱滓の分析結果などから「吹屋」になると思われる。

この遺跡の時期については出土した陶磁器の年代や周辺の遺跡が始まる年代から17世紀初頭と考えられる。出土した陶磁器は中国磁器、唐津・唐津系陶器を中心で、そのほかに伊万里焼、備前焼、信楽焼、織部焼などがみられるが、これらの時期は概ね16世紀後半から17世紀前半になるものが多く、特に遺構に伴う陶磁器の年代はこの時期のものがほとんどである。またこの吹屋跡周辺の遺跡の年代をみてみると、隣接する大安寺跡（大久保石見守の墓所）の創立年代が慶長10年（1605）、西本寺の創立年代は寛永8年（1631）である。

石見銀山史では、銀山の最盛期が江戸時代初頭の慶長から寛永期とされており、この下川原吹屋跡はこの時期の製錬所と考えられる。この時の奉行は大久保石見守と竹村丹後である。大久保石見守の在職期間は慶長6年（1601）～18年（1613）、竹村丹後は慶長18年（1613）～寛永12年（1635）となっている。大久保石見守時代の奉行所は山吹城大手の休役所にあり、竹村丹後の時に現在の代官所跡に奉行所を移している。戦国時代から江戸時代初頭大久保石見守治世下に奉行所が置かれた休谷一体は、山吹城下に城下町が形成され、休役所を中心として町の広がりがあったと考えられている。このような歴史的環境のなかにある下川原吹屋跡は、江戸時代初頭、石見銀山の最盛期の奉行大久保石見守か竹村丹後治世下における銀の製錬所跡と考えられる。

### (2) 遺跡の意義について

これまで石見銀山遺跡については、過去5年間で10ヶ所の発掘調査を実施しているが遺跡の性格・年代が明らかになったのは今回の調査が初めてとなった。また吹屋跡については分布調査により「山神奥灰吹跡」「棚畠谷灰吹跡」が、また絵図から吹屋のおおよその場所が知られていたのみである。

今回の下川原吹屋跡は周知の吹屋跡ではないが、遺跡の遺存状況は後世の搅乱をほとんど受けず良好な状態であった。調査の結果から、比較的短期間（17世紀代）で操業を終えた吹屋と考えられ、それが良好な遺存状況となった一因をなしていると思われる。また石見銀山の最盛期の頃の銀生産の様子についてこれまで不明な点が多くあったが、1軒の建物跡の中で銀製鍊がおこなわれていた可能性があり、最盛期の銀製鍊の遺構や作業の様子を知る上で貴重な資料を提供したといえる。からみの分析からは下川原吹屋跡で製鍊された鉱石は、仙ノ山一帯に広がるマンガン分を多く含む鉱石であることが判明し、この鉱石がこの吹屋跡に運ばれてきたものと思われる。

石見銀山遺跡の中での下川原地区については、これまで具体的な様相を示す資料がなかったが、現在の市道の位置が江戸時代の道とさほど変わっていないと考えられることから、現在残る大森の町並みと用様に、道に面して間口を設け家並みが続いていた可能性があり、正保2年（1645）に作成された「石見国絵図」（島根県指定文化財；津和野町所蔵）の銀山の山内の様子は、当時の状況をある程度正確に描写したものと思われる。

下川原吹屋跡は、石見銀山遺跡の中でも貴重な遺跡であり、今後は保存・活用の方向で検討されるべきである。また今回の調査過程で問題となった鉱滓であるからみの分析や製鍊作業で使用される諸道具については、今後の調査で留意されなければならない。具体的には、からみの分析については排出の段階によりその状態や成分が異なるので、遺構に伴うものとそうでないものに分類することが必要であり、遺構から出土したものについては出土地点、土層などを正確につかんでおく必要がある。また製鍊作業で使用される諸道具については、吹子の羽口の先端などは微小なものもあり、遺構の検出作業において留意されなければならないものである。

石見銀山遺跡については地下遺構の具体的な様相が少しずつ明らかになってきている。今後の調査については、整備も含めて長期的な計画で実施すべきであり、古文書等の文献や民俗、あるいは鉱床や鉱石等も含めて、学際的な調査にも取り組む必要があろう。

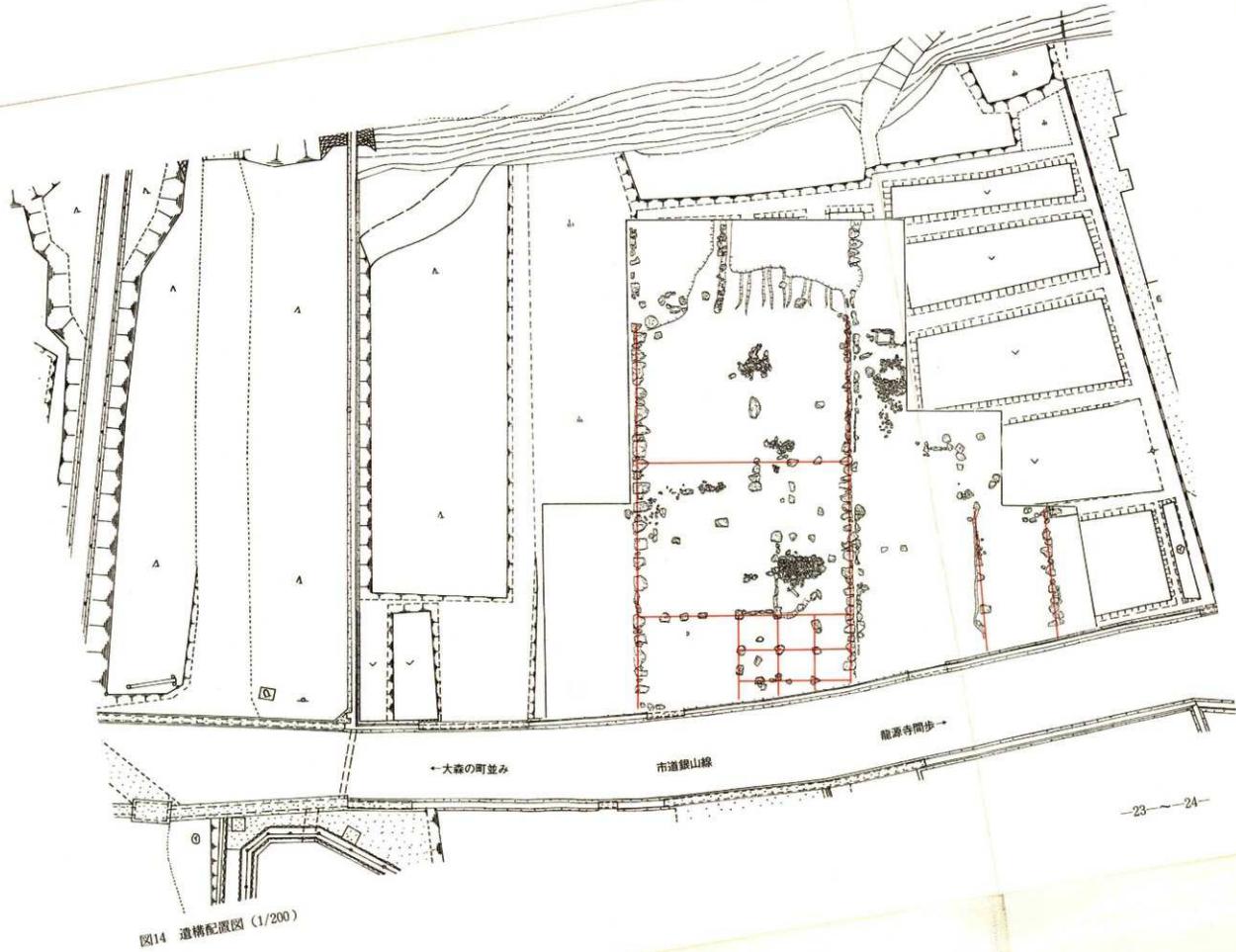


図14 造構配置図 (1/200)

## V 石見銀山遺跡下川原下組地区出土 からみの分析調査結果

日本鉱業史研究会理事

葉賀 七三男

### 1. はじめに

平成4年3月8日、発掘調査終了期の石見銀山遺跡下川原下組地区を見学する機会を得た。遺構付近に、かなりの銀製錬の際排出されたと推定されるからみ（鉛滓）、すり（不要となった脈石）の堆積を認めたので、冶金考古学の面からも所要の分析調査を実施し、その実態を明らかにする必要を感じた。特に数点の試料を選び、東北大学・素材工学研究所岡田広吉先生に依頼し、同研究所分析スタッフの許で調査を実施したが、その一部を速報することとする。

### 2. 分析試料

からみの中、特に大塊で、きわめて均質な銀製錬に関しては異様にとれる資料の一部を割りとった試料で、その形態は写真1に示すとおりである。試料の物理量は次のとおりである。

重量	見掛け気孔率	吸水率	見掛け比重	カサ比重
122.6(g)	3.11%	0.90%	3.57	3.46

かなり均質で孔があまり存在しない、からみとしては重い部類に入るものである。



写真1-1 からみ(表)

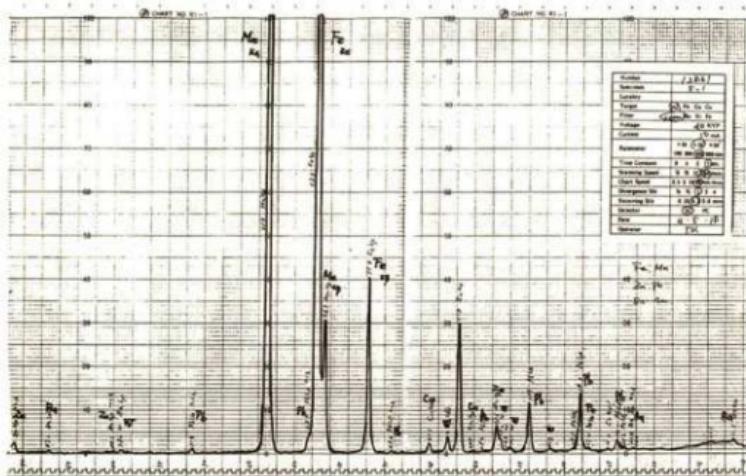
写真1-2 からみ(裏)



写真1-3 からみ(横)

### 3. 蛍光X線分析結果

からみの元素組成をみるとため、試料を粉末にして蛍光X線分析を実施した結果は第1図のとおりである。一般に製鉄あるいは銅製錬の際排出されるからみは、鉄を主要元素として、その他微量成分として製鉄の場合はマンガンもしくはチタンが認められ、銅製錬の場合は微量の銅、鉛、亜鉛などが検出されることになっているが、下川原出土の試料は、鉄と同量ほどマンガンが検出され、その上亜鉛、鉛、銅がかなりの量検出されていて、形態同様にまことに異質なからみである点を証している。

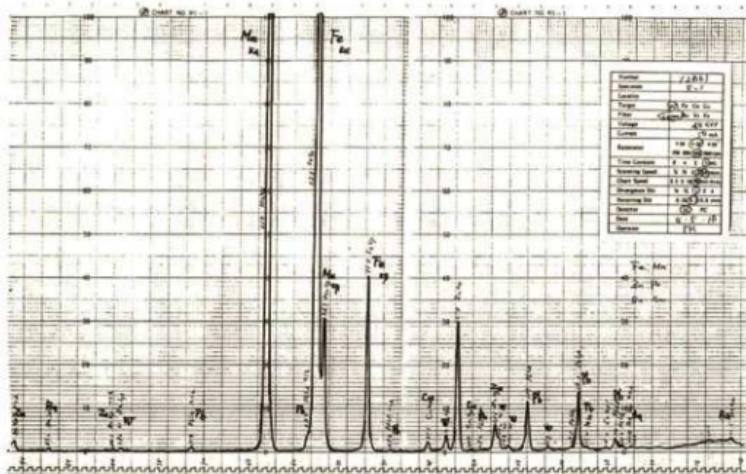


第1図 からみ螢光X線分析結果

#### 4. 反射顕微鏡調査結果

からみ研磨面の反射顕微鏡による調査結果は、写真2に示すごとく、全面に角ばった鉱物が散在し、その間に白い小斑点が点在している。黒い部分は孔（空隙）を示している。鉱物組成を検討するためX線解析を実施したが、一般にからみは細長い角ばった短冊形ファイヤライト（鉄かんらん石） $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ が顕微鏡視野の全面に散在するのが鉄、非鉄を問わず普通であるが、下川原出土のからみは、マンガン分が多量に含まれた結果クネーベルかんらん石（クネーベル石・クネーベルライト） $2(\text{Fe}, \text{Mn})\text{O} \cdot \text{SiO}_2$ として存在しているのが明らかとなった。

また、点在する白点も、詳細な検討の結果、第1図に掲げた亜鉛、鉛、銅分が硫化物として存在するものと判断される。



第1図 からみ螢光X線分析結果

#### 4. 反射顕微鏡調査結果

からみ研磨面の反射顕微鏡による調査結果は、写真2に示すごとく、全面に角ばった鉱物が散在し、その間に白い小斑点が点在している。黒い部分は孔（空隙）を示している。鉱物組成を検討するためX線解析を実施したが、一般にからみは細長い角ばった短冊形ファイヤライト（鉄かんらん石） $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ が顕微鏡視野の全面に散在するのが鉄、非鉄を問わず普通であるが、下川原出土のからみは、マンガン分が多量に含まれた結果クネーベルかんらん石（クネーベル石・クネーベルライト） $2(\text{Fe}, \text{Mn})\text{O} \cdot \text{SiO}_2$ として存在しているのが明らかとなった。

また、点在する白点も、詳細な検討の結果、第1図に掲げた亜鉛、鉛、銅分が硫化物として存在するものと判断される。



石見銀山遺跡・下川原下組地区全景(調査前)



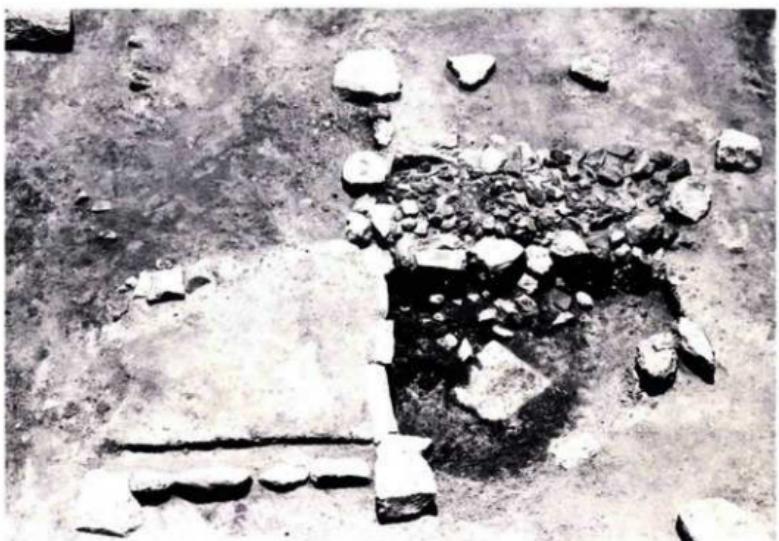
遺構検出状況(西から)



建物跡(間口 6 間)検出状況



建物跡(間口 6 間)検出状況



石組遺構検出状況(北から)



石組遺構検出状況(東から)



第1 炉跡検出状況



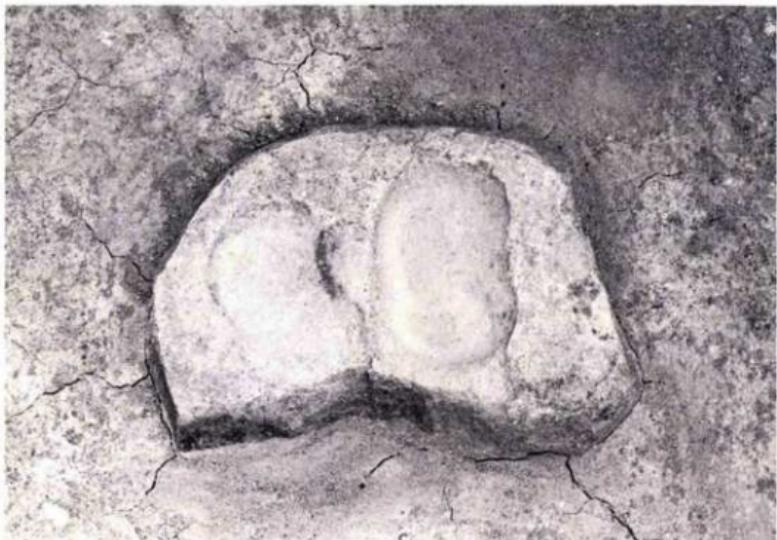
第2 炉跡検出状況



側構石積狀況



側構石積狀況



要石検出状況



側溝礎石にのこる柱の痕跡



溜槽状遺構検出状況



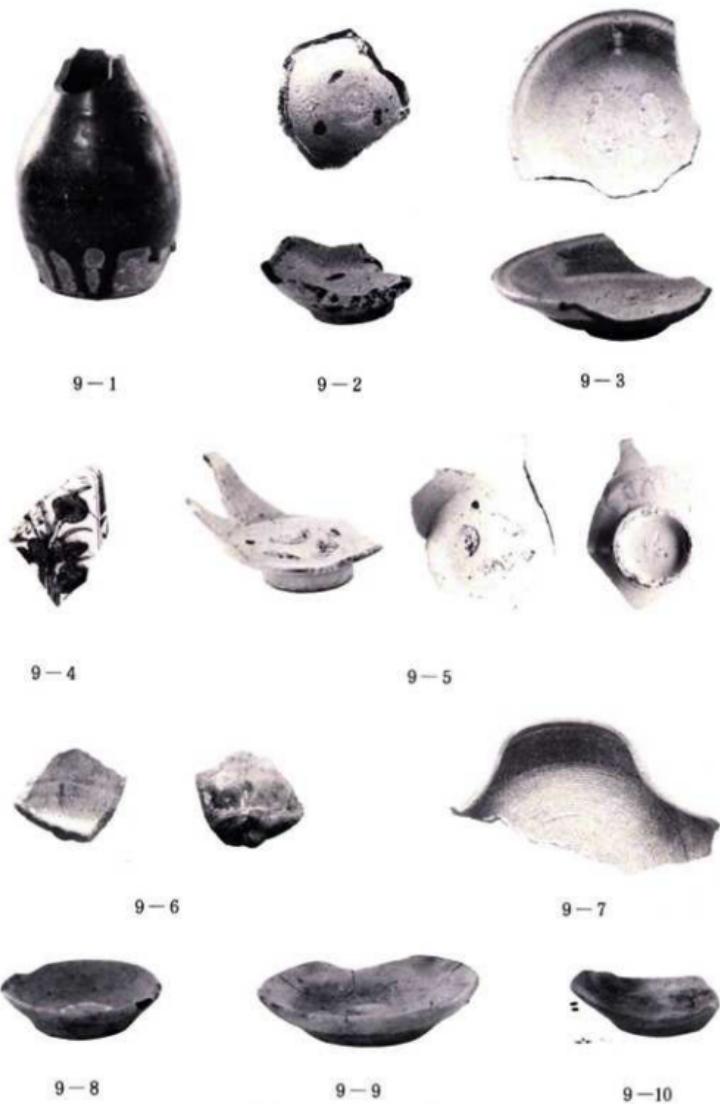
建物跡(間口 2 间)検出状況



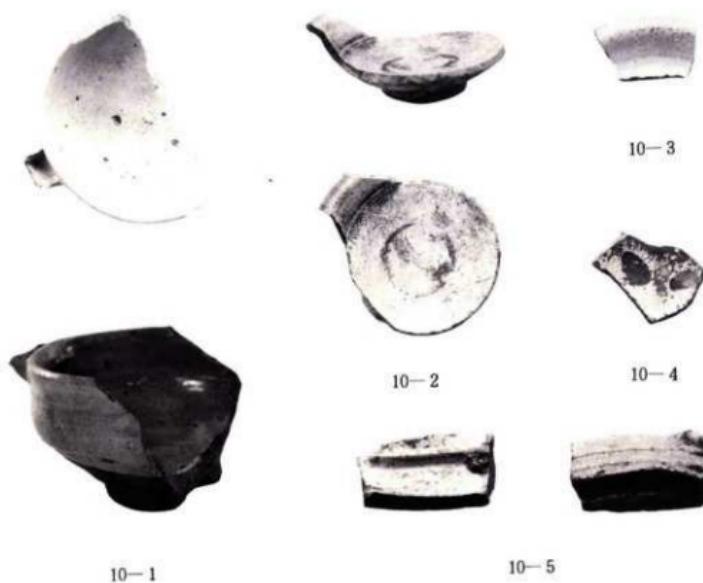
D 3 G 北壁土層



遺物出土狀況



下川原下組地区出土遺物(1)



11-1

11-2

11-3

11-4

11-5

下川原下組地区出土遺物(2)



12-1



12-2



12-3



12-4



12-5



12-6



12-7



12-8



12-9



12-10



13-1



13-2



13-3



13-4



13-5



13-6

13-7

下川原下組地区出土遺物(3)

**大田市埋蔵文化財調査報告 14  
石見銀山遺跡発掘調査概要 5**

1992年3月

**島根県大田市教育委員会**  
(島根県大田市大田町大田口1111番地)

